

博士学位論文審査結果の要旨

学位申請者氏名	半 澤 典 子
論 文 題 目	戦前期ブラジル・サンパウロ州ノロエステ地方と日本語新聞 －香山六郎と聖州新報－
論文審査担当者	主 査 坂 口 満 宏 ㊞
	審査委員 根 川 幸 男 ㊞
	審査委員 本 田 毅 彦 ㊞
	審査委員 谷 口 淳 一 ㊞

日本からブラジルへの集団移民は、1908年の笠戸丸移民に始まり、第二次世界大戦による中断をはさみ、1952年に再開したのち、国際協力事業団の移住統計でみるかぎり1993年まで続いた。数の上では1908年から1941年までの第二次世界大戦前に18万7000人余り、1952年から1993年までに5万4000人近くがブラジルに渡ったとされている。戦前期のブラジル移民は農業移民が主体で、1940年現在の統計によれば日本人在留者はおよそ20万人、そのうちの9割がサンパウロ州に居住していた。そして同州における日本人の集団移住地は、パウリスタ線やアララクアラ線、ノロエステ線やソロカバナ線等の主要鉄道沿線に分布するという特徴をもっていた。

こうした歴史をもつ日本人ブラジル移民史については、『ブラジルに於ける日本人発展史』上下（1941、1953年）を草分けとし、近年では『ブラジル日本移民百年史』全5巻（2010、2012、2013年）においてテーマ別にまとめられるほど、一定の研究蓄積がある。移民社会のリーダーを顕彰した評伝も数多く、日本語新聞に関係したものとしては『日伯新聞』の三浦鑿、『週刊南米』を発行した星名謙一郎についての研究がある。香山六郎（1886-1976年）については日本語新聞『聖州新報』の発行人としてはもとより、『移民四十年史』（1949年）の編著者、自らの半生を詳述した『香山六郎回想録：ブラジル第一回移民の記録』（1976年）の著者として知られている。しかし香山六郎個人の歩みを実証的に掘り下げた研究はほとんどない。

この点において本論文は、「日本人ブラジル移民の先駆者」であり、日本語新聞『聖州新報』を創刊した「移民知識人」としての香山六郎像の構築をめざすもので、日本人ブラジル移民史研究の空白部を埋めるものとして位置づけることができる。その構成は、序章と終章を除いて七つの章からなり、第1章で日本人ブラジル移民史の時期区分を示し、第2章から第4章において香山六郎の個人史を叙述。第5章ではブラジルで発行されていた日本語新聞を概観し、第6章にて新聞俳壇で活躍した人物と季題について考察した。そして第7章をコーヒー干害にあった日本人農民による日本政府への経済支援要請運動の分析にあてている。

本論文の成果は、各章ごとの主題に関する基礎史料を丹念に収集し、香山六郎と『聖州新報』研究の水準を高めたことである。

その一端は、これまでブラジル渡航前の香山の学歴といえはその『回想録』に依拠するものであったが、かかる史料の弱点を克服すべく半澤は、香山が在籍した各学校—京都府立第一中学校、熊本済々黌、日本大学・大学部商科附属殖民科—の『学友会誌』や同窓会会員名簿を渉猟し、在籍の有無、席次等をつきとめたことに見ることができる（第2章）。

また、第5章において1941年以前にブラジルで発行されていた主要日本語新聞3紙の創刊時期・創刊の目的・印刷方法・購読料・発行部数等を比較し、「表5-2 主要日本語新聞概要」として的確にまとめたことは、今後の当該分野での研究に寄与すること大である。同様に第6章で示された「表6-2 ブラジル季題分類（1937年当時）」「表6-3 ブラジル季題の日本名（1937年当時、三水会俳句より）」の作成も労作で、今後の研究において大いに参照されることだろう。

さらに巻末に付けられた詳細な「香山六郎・ブラジル日本人移民関係年表」は、香山六郎の90年におよんだ生涯を対象範囲とするものであるが、記載事項のすべてに典拠を明記しており、関係人物の動向把握においてはもとより、ブラジル・サンパウロ州における日本人移民の歴史を跡づける索引としても活用できるものである。

なお、半澤によれば、香山による『回想録』という二次史料の弱点を克服すべく、香山の遺族から『回想録』の元原稿となっていた『清書原稿A』を入手したが、読解に手間取り、本論文では十分に活用できなかつたという。今後の研究に期待するものである。

このように本論文には手堅い基礎作業の成果が随所に示されているが、その反面で本論文全体を貫く課題の設定と論理的な考察、歴史研究の根幹である史料批判と実証的な手法における史実の提示という側面において、いくつか検討を要する事例があったことも指摘しておかねばならない。

その一つは、本論文では日本人ブラジル移民史における香山六郎の存在を顕彰しようという思いが強いためか、丁寧な論証を示すことなく、自らが抱く香山像へと帰結させてしまう論法がしばしば見られることである。史料提供者である香山の遺族の期待に応えようとする思いが先走る叙述が多いことも否めない。この点を言い換えるならば、本論文では『回想録』の元原稿とされる『清書原稿A』も含めて、香山自身の記録や著作を主たる史料としているため、香山六郎という人物の言動を相対化する文献や証言によって多元的に検証していくという姿勢が弱いということになる。そのため論文冒頭で提起された「日本人移民による民間主導論」なる課題設定も後付け感が強く、十分に展開されているとはいえない。

二つ目は、史料の引用・解釈において多くの誤記や誤読があることである。この点も上記のことと関連しており、自らの理想とする香山像に適する記述にそった史料を抜粋するという傾向にあるため、史料本来の文脈を読み誤り、短絡的な評価を下しがちである。本論文が公表され、多方面からの批評や批判を受けることで、自覚的に修正されることを期待したい。

以上のことをふまえ、審査委員一同は、本論文が博士（文学）の学位を授与するに適格であると判断する。